

# 国立国語研究所学術情報リポジトリ

〈著書紹介〉 朝日祥之 著/真田信治  
監 『サハリンに残された日本語樺太方言』

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2015-10-30 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 朝日, 祥之 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.15084/00000723">https://doi.org/10.15084/00000723</a>

朝日祥之 著／真田信治 監

『サハリンに残された日本語樺太方言』

海外の日本語シリーズ 3

2012年10月 明治書院 A5判 160ページ 2,000円＋税



## 朝日 祥之

本書は、日本の北に位置し、1905年から1945年にかけて日本がその南半分を領有したサハリン（旧樺太）で形成された日本語の接触方言に見られる特徴を、特に現地で生活してきた朝鮮人、ウイльта人、アイヌ人、ニヅフ人を中心に概説するものである。

サハリンにはこの40年の間、当時の人口の95%が日本人である時代があった。その時期に40万以上にのぼる居住者が生活していた。当地に移住者が持ち込んだ日本語方言の接触により、「樺太方言」という接触方言が形成された。当時の方言を調査した平山（1957）によれば、当時の樺太方言は北海道方言との共通点が多く見られるとされる。北海道方言と樺太方言の形成が関連している様子が窺えるのである。

その日本語は第二次世界大戦後、それまでとは異なる歴史を歩むことになる。引き揚げが終了した1950年には、日本人の樺太方言話者のほとんどが現地からいなくなったのである。その一方、南サハリンを日本が領有していた時代に日本語を習得した朝鮮人、ニヅフ人、ウイльта人などは現地での生活を続けた。もちろん、当時、ロシア人を含めた彼らと婚姻関係をもった日本人の多くは、現地で生活してきた。

ベレストロイカ以降、外国人の入国が可能になり、日本人を始めとするさまざまな分野の研究者が現地で調査を実施するようになった。言語学的研究については、1990年以降、樺太アイヌ語、ニヅフ語、朝鮮語、ウイльта語の調査がなされているが、日本語を扱った研究は著者が現地で調査を開始した2003年まで存在しなかった。その後に現地で実施された研究をまとめた本書は、日本語樺太方言の姿を総合的に見つめる試みとして位置付けられる。

本書の目的は、この樺太方言が接触方言であることを示すと同時に、第二言語として（人によっては第一言語として）習得した日本語に見られる特徴を、これまで著者が現地サハリン、そして北海道、東京、韓国で実施してきた調査研究の成果を活用しながら考察を行うことにある。

本章の構成を以下に示す。

はじめに

第1章 サハリンの概要

第2章 サハリンの言語接触史における日本語の位置付け

第3章 サハリンの日本語を記録・保存するための調査

第4章 サハリンに生まれた日本語の接触方言

- 第5章 ポロナイスク（敷香町）における言語接触
- 第6章 漁撈語彙に見る言語接触
- 第7章 ウイルタ人の日本語に見られる言語的特徴
- 第8章 サハリンにおける「危機言語」と日本語教育
- 第9章 まとめと今後の展望
- 付 録 サハリンでの日本語談話データ

第1章では、サハリンの概要から始まり、第2章でサハリンにおける言語接触状況を通時的に考察する。樺太方言の調査データを収集するためのフィールドワークの方法を第3章で記し、第4章で、樺太方言の特徴を語彙、音声・音韻、形態、アクセントのそれぞれについて要説する。第5章では、ポロナイスク（旧敷香）における言語接触状況を、日本領有時代における日本語教育なども含めながら述べ、第6章では、漁撈語彙から見たサハリンの言語接触、第7章ではウイルタ人の日本語に見られる特徴をそれぞれ取り上げる。第8章では現在のサハリンにおける少数民族（朝鮮人、ウイルタ人、ニヅフ人、アイヌ人、日本人）を取り巻く民族語教育の現状を示し、第9章で本書のまとめを行った。最後に朝鮮人による日本語談話資料を付録として付した。

本書は、戦後半世紀以上が経過してはじめて着手された日本語樺太方言をめぐるさまざまな社会言語学的問題に取り組んだものとして位置付けられる。今後、他の海外の日本語シリーズとして刊行されたものと並んで、旧来の方言学、日本語学では指摘されてこなかったような、新しい知見（特に接触言語学的な観点から得られる知見）が得られ、今後の発展が期待できる。

#### ●参考文献●

平山輝男(1957)『日本語音調の研究』東京：明治書院。

#### 朝日 祥之（あさひ・よしゆき）

国立国語研究所時空間変異研究系准教授。博士（文学）（大阪大学）。国立国語研究所情報資料部門、研究開発部門研究員を経て、2009年10月より現職。

主な著書・論文：『ニュータウン言葉の形成過程に関する社会言語学的研究』（ひつじ書房、2008）、「改訂版社会言語学図集」（共編、秋山書店、2010）、「サハリンに生まれた日本語の接触方言」（『日本語学』29(6)、2010）、「敬語研究と実時間的言語変化研究との接点を求めて」（共著、『社会言語科学』11(1)、2008）。

受賞：第9回徳川宗賢賞（優秀賞）（社会言語科学会、2010）。

社会活動：International Conference on Methods in Dialectology Steering Committee, ISDG (International Society for Dialectologists and Geolinguists) Scientific Committee, Foundation for Endangered Languages Executive Committee, NWAV-AP (New Ways of Analyzing Linguistic Variation and Change in the Asia-Pacific Region) Steering Committee, 変異理論研究会世話人。